

世界経済 波乗りサロン 無料キャンペーン中！ 今月まで！

↓↓↓

<https://note.com/usomitaina/n/n3cfd3e23bc6b>

## 「グレート・リセット」の到来

私も含めて、為替アナリストたちは長年にわたり、国際通貨の「リセット」の兆候を探ってきました。

それは、主要な基軸通貨としてのドルの役割を低下させ、ブレトンウッズ方式の通貨会議で合意された代替通貨に置き換えるものです。

そして今、この「グレート・リセット」に向けた動きが加速しているようだ。

先日、英国で開催されたG7サミットでは、低所得国のCOVID-19危機への対策として、IMFの特別引出権(SDR)を1,000億ドル割り当てる事が承認されました。

バイデン大統領はこのアイデアを全面的に支持しています。  
ホワイトハウスは以下の声明を発表しました。

米国とG7のパートナーは、提案されている特別引出権(SDR)の配分の効果を、最も必要としている国々に倍増させるための世界的な取り組みを積極的に検討しています。

最大で1,000億ドルの規模になる可能性があるこの提案は、予防接種を含む健康上のニーズをさらに支援するものです

同日の別のプレスリリースでは、「健康上のニーズをさらに支援するためにSDRを再利用する取り組みを強く支持する」と、同様の見解が示されています。

また、先週水曜日、クリスタリナ・ゲオルギエヴァIMF専務理事は、8月中旬にIMF総裁が6500億ドルのSDRの割り当てを承認するとの見通しを示しました。

SDRとは何でしょうか？

基本的には「世界のお金」です。

1969年、IMFはドルに代わる流動性の供給源として、SDRを創設しました。

1971年、ドルは金や他の主要通貨に比べて切り下げられた。  
SDRは1970年から1981年までIMFによって発行された。  
1981年以降は、世界金融危機のあった2009年まで一度も発行されていない。

2009年の発行は、IMFがシステムの「配管テスト」を行い、正常に機能することを確認したケースである。

1981年から2009年までSDRの発行はゼロだったため、IMFはSDRを発行するためのガバナンス、計算、法的プロセスのリハーサルを行いたかったのである。

その目的は、当時の流動性への懸念を和らげることもありましたが、急に大規模な新規発行が必要になった場合に備えて、システムが機能することを確認するためでもありました。2009年の実験では、システムは問題なく作動した。

2009年以降、IMFはSDRを大量に新規発行するためのプラットフォームを構築し、SDR建て資産の深い流動性プールを確立するために、ゆっくりとしたステップを踏んできた。

2011年1月7日、IMFはドルをSDRで代替するためのマスタープランを発表した。

これには、SDR債券市場、SDRディーラー、レポ、デリバティブ、決済・清算ルート、流動性の高い債券市場の仕組みなどの付帯設備の構築が含まれていた。

2016年9月、IMFは中国元をSDRバスケットに組み入れ、中国に通貨の席を与えました。

つまり、SDRの範囲を広げるための枠組みができたわけです。

SDRは、IMF加盟国に豊富に発行され、将来的には、国際収支の決済、石油価格の決定、エクソン・モービル、トヨタ、ロイヤル・ダッチ・シェルなどの世界の大企業の財務会計など、世界で最も重要な取引の厳選されたリストに使用することができます。

SDRの基本的な考え方は、ドルを中心とした世界の通貨システムは本質的に不安定であり、改革が必要であるというものです。

この問題の一端は、経済学者のロバート・トリフィンにちなんで名付けられた「トリフィンのジレンマ」と呼ばれるプロセスにある。

トリフィンが、支配的な基軸通貨の発行者は、世界の他の国々がその通貨を十分に保有して発行者から商品を購入し、世界貿易を拡大できるようにするために、貿易赤字を出さなければならないと言っていました。

しかし、長い間赤字を出し続ければ、やがて破綻してしまう。

これは、1960年代初頭にドルについて言われたことである。

SDRはトリフィンのジレンマを解決してくれる。

今後数年の間に、民主的に選出された機関の監督が及ばないところで、気候変動のインフラやその他のエリートのペットプロジェクトに支出するために、国連や世界銀行などの多国籍組織にSDRが発行されることになるでしょう。